陳舜臣全集 第一巻

小説十八史略 (一)

講談社

陳舜臣全集 第一巻
小説十八史略(一)
定価二九〇〇円
第1刷発行　昭和61年5月20日

著　者　陳舜臣
発行者　野間惟道
装　幀　武山　忠
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二一一二一二一二一　〒一一二
電話　東京（〇三）九四五一一一一一
印刷　本文・豊国印刷　色物・暁印刷
製本　藤沢製本　製函　岡山紙器所
©陳舜臣　一九八六年
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担でお取替えします。

Printed in Japan ISBN4-06-192601-2 (0)（文二）

陳舜臣全集　第一巻　目次

小説十八史略 (一)　7
特別書下ろし作品
山河在り　第一回　539
登場人物一覧　4
関係地図　565

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小説十八史略(一)

主要登場人物一覧

紂王（ちゅうおう）　殷の暴君。周がおくった美女妲己に溺れ、酒池肉林、炮烙の刑などで人心を失い周に滅ぼされる。

文王（ぶんおう）　周の名主。紂王から西伯に任命される。

武王（ぶおう）　文王の長男。弟周公とともに紂王を敗死させ、周による天下統一をなし、初代の王となる。

周公（しゅうこう）　武王の弟。紂王打倒の一念で、妲己を赤ん坊の時から紂王好みに教育し、紂王に献上。文王、武王をたすけて殷を滅ぼす。

太公望（たいこうぼう）　姓は呂、名は尚。魚釣り中に文王にひろわれ、文王、武王を助けた周の元勲。

桓公（かんこう）　斉の十五代の王。名は小白。鮑叔牙、管仲を重用し、晋、宋、秦、楚らと天下を競い春秋時代最初の覇者（春秋五覇の一人）となる。

鮑叔牙（ほうしゅくが）　小白（桓公）のお守役。管仲との友情は厚く、「管鮑の交り」はこれに由来する言葉。

管仲（かんちゅう）　はじめ桓公の兄糾のお守役。のち桓公の宰相となり、覇業をたすける。『管子』の著者。

重耳（ちょうじ）　「逃げの重耳」といわれ、十九年の亡命のち晋の文公となる。春秋五覇の第二の覇者。

夷吾（いご）　重耳の異腹の兄弟。晋の惠公となる。

襄公（じょうこう）　宋の君主。春秋の覇者の一人に数えられることもある。つまらない仁を「宋襄の仁」という。

伍子胥（ごししょ）　伍家は楚の名門だが、父と兄が楚の平王に殺されたため、呉王闔閭に仕えて復讐を果たす。しかし、闔閭の息子夫差に入れられず自殺。

闔閭（こうりょ）　呉王。名は光。伍子胥を重用。越王勾践に敗れる。

孫武（そんぶ）　呉王闔閭に仕え、呉を覇者に導いた兵法家。『孫子』の著者。

荘王（そうおう）　楚の王。晋の景公を破る。春秋五覇の一人。

夫差（ふさ）　呉王。父闔閭の雪辱を果たすため「臥薪嘗胆」して越王勾践を破るが、越がおくりこんだ西施を寵愛し、再び呉に滅ぼされる。春秋五覇の一人。

范蠡（はんれい）　越王勾践の名臣。呉を滅ぼしたのち、名誉も捨てて西施と一緒に斉へ去る。

勾践（こうせん）　越王。呉王夫差に敗れるが、范蠡の智略に従い恭順を装い、ついに呉を破る。春秋五覇の一人。

西施（せいし）　越の范蠡から呉王夫差におくられ、呉滅亡の因となった絶世の美女。「西施のひそみにならう」

孫臏（そんぴん）　斉の人。孫武の子孫。呉の威王の軍師となり、馬陵の戦いで名を挙げる。『孫臏兵書』の著者。

龐涓（ほうけん）　魏の惠王の将軍。名門出の孫臏をねたみ、謀略で臏の刑（膝切り）にするが、馬陵で孫臏に敗れる。

淳于髡（じゅんうこん）　奴隷出身。「百家争鳴」時代の斉の学

士院長。読心術にたけ、博覧強記。

商鞅（しょうおう）　姓は公孫、名は鞅。秦の孝公の宰相となり、国力をつけ、秦の覇業の基を作った政治家。

戦国の七雄（せんごくのしちゆう）　韓、魏、趙、斉、秦、楚、燕の七大強国をさす。

戦国の四君（せんごくのしくん）　斉の田文（孟嘗君）趙の趙勝（平原君）魏の公子無忌（信陵君）楚の黄歇（春申君）

蘇秦（そしん）　権謀術数の研究家鬼谷先生の弟子。対秦同盟六国の「合従」を説いた縦横家。

張儀（ちょうぎ）　鬼谷先生の弟子。秦の恵文王の時、「連衡」を説き、蘇秦の「合従」策を崩した縦横家。

屈原（くつげん）　楚王の一族。親斉派で秦に抵抗を示したが、親秦派に謀られて追放され、汨羅に身を投げる。

韓非子（かんぴし）　性悪説を唱えた思想家荀子の門下生。韓の王族の一員。法治主義の思想家として秦で重用される。

李斯（りし）　荀子の門下生。楚の人。法治主義の実践者。呂不韋の家臣から秦王政（始皇帝）の丞相となり、統一国家の確立に貢献した。

始皇帝（しこうてい）　名は政。趙の人質だった子楚（秦の荘襄王）の子として邯鄲に生まれる。秦王となり六国を滅ぼして天下を統合し、度量衡、貨幣の統一などをおこない、万里の長城を築く。

趙高（ちょうこう）　始皇帝の末っ子胡亥を二世皇帝に立てる陰謀を計り、李斯を誘い遺言を捏造、権力を握った宦官。

呂不韋（りょふい）　子楚をたすけ秦王とする。のち宰相となり、始皇帝に仲父と呼ばれた。

王翦（おうせん）　秦の天下統一の戦さで活躍した老将軍。息子王賁、孫王離と秦の将軍を三代つとめる。

荊軻（けいか）　衛の人。「風蕭々として易水寒し」で有名な刺客。燕の太子丹の依頼で始皇帝暗殺を謀るが失敗。

蒙恬（もうてん）　蒙武将軍の息子。始皇帝の信任厚く、三十万の兵と長男扶蘇を托され、北方の守備に当る。

王賁（おうほん）　王翦の息子。秦王政の青年将校の一人。

頭曼（とうまん）　秦の始皇帝時代の匈奴の単于（皇帝）。

張良（ちょうりょう）　字は子房。張家は代々韓の宰相を務めた。劉邦旗上げの初期から参謀となり、劉邦に天下を取らせるべく補佐役に徹した功臣。漢建国の三傑の一人。

陳勝、呉広（ちんしょう　ごこう）　ともに農民出身。貧民の大軍を率い秦に造反、項羽、劉邦ら各地の挙兵の先鞭となる。

項伯（こうはく）　楚の項家の一族。項羽の従兄。項羽の陣営にいたが、張良への恩義から「鴻門の会」で劉邦を助ける。

項羽（こうう）　名は籍、字は羽。楚の勇将燕の孫。叔父項梁と挙兵。劉邦と呼応し、秦を滅ぼして覇王となるが、自分の力だけしか信じない弱点がある。ついに垓下の戦いで「四面楚歌」となって劉邦に敗れ、烏江で死ぬ。

范増（はんぞう）　項羽の優秀な軍師であったが、献言が一つ

一つ受け入れられず、ついに項羽軍を去る。

張耳（ちょうじ）　魏の滅亡と同時に陳余と姿を消す。十六年後、陳勝の造反軍に姿を現わし、のち劉邦軍に入る。

陳余（ちんよ）　張耳と十六年の亡命中、常に一緒に行動したが、のちに分かれ、張耳に滅ぼされる。

劉邦（りゅうほう）　漢の初代皇帝高祖。沛の一介の無頼の徒であったが、その人柄から人望をえ、人材が周囲に集まる。項羽と呼応して秦を滅ぼし、さらに項羽を倒して天下を統一し、漢を建国する。

蕭何（しょうか）　沛の書記から劉邦の造反軍に入り、特に経済、法律面で貢献、丞相となる。張良、韓信とともに漢建国の三傑。

曹参（そうしん）　沛の監獄の看守から蕭何とともに劉邦軍に入り、劉邦を助けた漢建国の功臣。

樊噲（はんかい）　劉邦の幼馴染。肉屋から漢の勇将となる。

盧綰（ろわん）　劉邦の竹馬の友。のち燕王となる。

黥布（げいふ）　姓は英、名は布。群盗の頭から九江王となる。のち漢に投じ、建国の元勲の一人に数えられる。

韓信（かんしん）　項羽軍から劉邦軍に転じ、垓下の戦いで劉邦を勝利に導く。心理作戦にすぐれ「背水の陣」も彼の策。漢建国の三傑の一人だが、のち独立をくわだて劉邦に滅ぼされる。

冒頓（ぼくとつ）　漢時代の匈奴の単于。頭曼の息子。

韓王信（かんおうしん）　韓の王。劉邦についたのち、項羽に降り、また劉邦軍に復帰するが、最後に匈奴に降る。

彭越（ほうえつ）　もと群盗の頭目。梁王となる。

臧荼（ぞうと）　漢成立前からの燕王であったが、劉邦即位ののち謀反して討たれる。曾孫の王夫人が武帝をうむ。

呉丙（ごぜい）　漢成立以前からの長沙王。劉邦一族のほかの王の多くは粛清されるが、息子呉臣以下四代まで残る。

文帝（ぶんてい）　劉邦の四男。名は劉恒。母は薄氏。名君と謳われた。元号を始める。

呂后（りょこう）　高祖劉邦の糟糠の妻。劉邦亡き後の約十五年間実権を握る。漢建国の功臣を次々と粛清した。

周勃（しゅうぼつ）　息子周亜夫と親子三代、漢の太尉。

景帝（けいてい）　文帝の子、名は劉啓。母は竇氏。文帝、景帝の約四十年の治世が武帝の黄金時代の基礎をつくる。

武帝（ぶてい）　景帝の子。名は劉徹。母は王夫人。十六歳で即位。孔孟派を重用し、前漢の黄金時代をつくる。

衛子夫（えいしふ）　武帝の実姉平陽公主の洗濯女の娘から、武帝の寵愛を受ける身となり、のち皇后となる。

軍臣（ぐんしん）　武帝の時代の匈奴の単于。

衛青（えいせい）　衛子夫の弟。奴隷の身から武帝に取りたてられ、匈奴を七度討った大将軍。

公孫弘（こうそんこう）　小役人をクビになり、豚を飼っていたが、七十歳にして武帝に登用され、五年で丞相となる。

1

日を射る者

人間。

ただ人間。

ひたすら人間を追究する。

これが古くから中国人の史観であった。だから神話がすくないのだ、という人がいるかもしれない。だが、これには異議がある。神話はけっしてすくないとはいえない。ただ歴史の記述者が、自分たちの著書から、できるだけ神話を削ったのである。

とくに儒学が中国の思想界を牛耳ってからは、その傾向がはなはだしい。

——怪力乱神を語らず、というのが、孔子の姿勢であった。

じつは中国にも、神話は豊富に存在していた。そしてそれは、人間的すぎる、という特長をもっていた。

神話を紹介しよう。——

人間的すぎる中国の神話のなかでも、最も中国的な性格をもつとおもわれる神話をえらびたい。

『十八史略』という本は、正史にもとづいて書かれたのである。正史に神話がすくないのだから、十八史略にもそれがすくないのはあたりまえであろう。

太古、三皇、五帝、と語られてゆき、蛇身人首だとか、人身牛首だとかいった記述はあるが、名前を列挙するだけといってよい。エピソードらしいエピソードは記されていない。

この『小説十八史略』の冒頭に、『十八史略』に載っていない神話伝説を紹介することについて、作者は複雑な気持でいる。

たとえてみれば、万雷の拍手のなかに、非難がましい声がまじっているのをきくかんじなのだ。

羿のことを語ろう。

羿は堯の時代の英雄神である。——ある、と断定してはいけない。あるといわれている、と言ったほうがよいだろう。夏王朝の時代にも、羿というのがいて、帝大康を追放したという記事が『史記』にのっている。

堯のころの羿と、夏のころの羿とが同一人物であるかど

うか、ここで詮索する必要はあるまい。堯にしろ夏にしろ、伝説時代に属するのだから。

どちらの羿も、弓の名人で、大そう勇猛であったことは共通している。

天上にいた羿が、下界に派遣されたのは、もとはといえば、天帝の息子たちのいたずらからであった。

天帝に十人の子がいた。みんな太陽である。その母親は羲和で、彼女は六頭の竜がひく車に、毎日一人ずつ我が子を乗せて走らせることにしていた。順番がきまっているので、十の太陽は、十日に一度だけ天空にのぼる。人間の側からみれば、いつも太陽は一つだけだが、じつは交替制だったのである。

何千年、何万年もくり返すうちに、十個の太陽は飽き飽きしてきた。扶桑の木の蔭で、兄弟たちは語り合った。

——いっぺん、みんなでそろって遊びに出かけようじゃないか。おふくろはうるさいから、黙ってとび出そう。

かくて、十個の太陽が、いちどに空にかがやくことになった。

太陽兄弟は手に手をとり合って、たのしく遊んでいたが、これでは人間どもがたまらない。十個の太陽がいっせいに照りつけるのだから、暑いのなんの、焼け死にするばかりであった。そのうえ、農作物が照りつけられて、枯れ死んでしまった。

人民の苦難に、そのときの地上の聖王であった堯は、天帝に祈りをささげて救いを乞うた。当時の人民が悩まされたのは、十個の太陽だけではない。猛獣、妖怪、害鳥など、多くの大害をもたらすものがあった。

地上の聖王に頼まれると、天上のあるじもいやとはいえない。猛獣や害鳥を殺すには、弓の名人が最適任である。天上諸神のなかで、弓の腕前にかけては、羿の右に出る者はなかった。

羿がえらばれたのは、順当な人事のようにみえて、じつはそうではない。たしかに弓の名手ではあったが、人情(神情というべきか)に通じないところがあった。

天帝にしてみれば、十個の太陽はみんな可愛い我が子である。自分が派遣する羿が、我が子を殺すなど、思いもかけなかったのである。強い弓で、びゅーんと、すれすれに矢を放って、おどかして扶桑の木の下に追い返してくれるものとばかり考えていた。しかし、

——人民のために服務してこい。

と言われた羿は、それを額面どおりにうけとって、人間に害をなすものには、容赦しない覚悟で出かけた。

下界へおりるについて、羿は妻を伴った。神の世界の出張は、夫婦同伴が原則だったようである。羿の妻は、嫦娥という名であった。

羿は地上に降り立つと、天空にならんでいる十個の太陽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を射おとそうとした。腕におぼえがあり、矢は十本で足りる。箙に十本の矢を用意して、彼はつぎつぎに太陽を射た。

堯はあわてた。

十個も太陽が出ると困るが、一個もなくなれば、この世は闇ではないか。農作物も育たないし、それよりも人間が生きられない。

そこで、堯は人に命じて、羿の箙からそっと一本の矢を抜きとらせた。

一発必中の矢は、九本で九個の太陽を射おとして、一個だけ天空に残ることになった。

太陽の精は三本足のカラスである。

羿はさらに人間を食う怪獣や怪鳥、漁師の舟をひっくり返す大海蛇などを、ことごとく退治してしまった。大手柄である。

だが、天帝はよろこばなかった。

我が子を九人も殺されたのだから、怒り狂っている。

「おのれ、羿のやつめ！　やつの神籍を剝奪せよ」と、左右の者に命じたのである。

神の世界にも戸籍があり、それを抹消されたので、羿夫妻はもう天上に帰ることができない。

神は天上に住むほかに、不死の特権を与えられている。もはや神でなくなった羿夫妻は人間なみに死なねばならない。天上復帰はあきらめるとしても、死んで地獄に投げこまれることだけは我慢できない。

このことが原因で、夫婦喧嘩のたえまがなかったのは、とうぜんであろう。

「あなたがバカなのよ。調子にのって太陽を九つも射おとして威張ってるんだから。さ、なんとかしてよ！」と、嫦娥はヒステリックに叫ぶ。

「そんなにギャアギャア喚くな。なんとかしてやるよ」

人間の亭主とおなじで、英雄神の羿も妻のヒステリーをもてあました。彼とて死にたくないのは同じである。なんとかしたいのだが、もはや神ならぬ身、どうしようもない。

そのうえ、羿はちょっとした浮気をした。

妻に喚かれて、むしゃくしゃしていたところなので、そんな気になったのであろう。

相手は人妻である。放蕩児として知られている河伯の妻、洛嬪という絶世の美女だった。彼女のほうも、夫の女狂いに鬱々として楽しまなかったところへ、羿という頼もしそうな男性があらわれたのである。

羿が河伯の目に矢をつき立て、河伯が天帝に訴えに行くという一幕があったが、この浮気騒動は、まもなくおさまった。

羿は妻の嫦娥とヨリを戻したのである。

こういえば、オトコがけしからぬ、ということになるが、この物語は女の裏切りがテーマなのだ。

――裏切りは女の性。

うっかりそう言えば、女性側は柳眉を逆立てて、

――男の本性こそ裏切りよ。

と言い返されるにきまっている。

男が女を、女が男を、それぞれもとめるのは、人間の宿命である。あまりにもいちずに、思い詰めてもとめると、思慕過剰となり、相手への期待が膨脹しすぎてしまう。現実はその期待に及ばず、そのために裏切られたような気になる。……

まずこんなところであろう。

じっさいには、相手に裏切られたという感じは、男のほうが強いのかもしれない。男のほうがいくらかロマンチックであり、女のほうがひどく現実的であるケースが多いからだ。

竹取物語のかぐや姫が、言い寄る男どもをことごとく振ったのは勝手だが、心をこめて養育してくれた翁をふりきって昇天したのはやはり不人情といわねばならない。翁となっているが、年齢はどうでもよい。そこにえがかれたのは、女に裏切られたオトコの姿にほかならない。

さて、夫婦喧嘩に明け暮れていた羿は、耳寄りな話をきいた。

崑崙山に西王母という神がいて、不死の薬を持っているという。ただし、途中に険路、深淵、火焔山などがあるため、ふつうの人間はそこまで行き着けない。

「よし、いいことをきいた。すぐに行くぞ」と、羿は出発した。

神籍から人籍に格下げされているが、彼はなみの人間ではない。崑崙山へ行くことなど、かんたんであった。

西王母はたしかに不死の薬を持っていたが、あと僅か二粒しか残っていない。

「もうあとはありませんよ。吉日をえらんで、夫婦で一粒ずつ飲みなさい。一粒飲めば不老不死となります。……二粒飲めば昇天して神になれるのですが」と、西王母は説明した。

母という字があるので、女性神と思われるが、西王母については男性説もある。ともあれ、羿は喜び勇んで、妻のところへ戻って、西王母の話を告げた。

「不死でいいじゃないか。地上だって、けっこうたのしいものね。べつに天に昇ることはない。二人でこの地上で、仲よく暮そうよ」と、彼は言った。

妻の嫦娥は、「そうね。……」とうなずいたが、腹のなかでは別のことを考えていた。

（こうなったのも、みんなこのオトコのせいで、あたしにはなんの責任もない。不死だけじゃ不足だよ。昇天の権利

も回復させてもらわなきゃ割に合わないわ。……）

一粒ずつ飲めば、夫婦仲よく不老不死だが、どちらも昇天できない。一人が二粒飲めば、一人だけ昇天できるが、残された一人は昇天できないどころか、死んでしまわなければならない。

さあ、どうする？

嫦娥は吉日を待たずに、西王母の薬を二粒とも飲んでしまった。女はこわい。……

はたして彼女は身が軽くなり、しだいに天へ昇って行く。途中で彼女は考えた。——

（このまま天へ昇れば、夫を置き去りにしたと、後指をさされるおそれがある。ほとぼりがさめるまで、どこかでひと休みしよう）

天と地のあいだに、月が浮かんでいる。嫦娥はそこに不時着陸して、しばらく休むことにした。

ところが、月宮に入ると、彼女は自分のからだの異常に気づいた。だんだん背が低くなり、腹がせり出し、腰が横にふくらんで行くのだ。上と下から同時に圧されて、ひしゃげるかんじである。

やがて、首は肩のなかに陥没し、口は裂けたように左右にのび、目がみるみる大きくなった。皮膚の色も黒ずみ、おまけに大きなブツブツがいたるところにできた。

きゃーっ！

と、彼女は悲鳴をあげたつもりだが、それは鈍い、つぶれたような音でしかなかった。

うごこうとしても自由にうごけない。それも道理で、彼女は一匹の醜い蝦蟆に変身していたのである。

この神話の誕生はいささか興味がある。裏切られた男が、せめてものうさばらしに、裏切った女をガマガエルに変えるストーリーをつくったのではあるまいか。月の表面がアバタだらけなので、ガマガエルを思いついただけで、それはゲジゲジでもゴキブリでもよかったのに相違ない。

このことがあってから、羿の妻の嫦娥の名は、月の別名になってしまった。

月を見るたびに、世の男性たちは、嫦娥の物語を思い起こし、九つの太陽に弓をひいたり、霊薬を女に預けるような、そんなばかなことをしてはならない、と自分に言いきかせてきたのである。

何千年もそう言いきかせてきたのに、そのわりには、世の殿方はあまり賢くなっていないようにみうけられる。

可哀そうなのは羿である。

彼は天に昇るどころか、不死さえ叶えられなかった。

死が彼の前途に待ちうけていた。しかも、その死は大そう悲劇的なものだった。

——羿を殺すものは是れ逢蒙——ということわざがある。

逢蒙という男は、羿の弟子であり、家来でもあった。羿は彼に弓の技術を教えていたのである。逢蒙はしだいに弓術に上達し、師の羿さえいなければ、天下無敵というところまでなった。そこで、羿を殺そうという気になったのである。

弓で射殺そうとして失敗し、けっきょく、桃の木の棍棒で殴ることによって、羿を死に到らしめることができた。

右のことわざは、ふつうには、

——飼い犬に手をかまれる。という意味に用いられている。

しかし、羿の物語のほんとうの意味は、もっと深刻であった。

——あらゆるわざについて、師の最大のライバルは弟子であり、油断をすれば、いつとってかわられるかわからない。弟子にとっても、師は打倒すべき最大の目標である。

という冷たい現実を教えるものなのだ。

『孟子』は、この羿の物語について、きびしい評論を加えている。

——師を打倒しようとするような人物を、弟子にしたのだから、羿にも落度がないとはいえない。……

はい、そうですか。——とひきさがるよりほかはない。

この物語は、人間的、あまりにも人間的ではないか。人間のにおいが、強く鼻をつく。中国の神話は、かくも人間くさいのである。

西王母からもらった二粒の霊薬を前にして、嫦娥があれこれと思い悩むシーンは、現代のドラマのテーマになりうるであろう。

中国のオーソドックスな歴史は、三皇五帝から説き起こされるのがふつうである。

十八史略もまず三皇五帝の名を挙げる。

三皇——伏羲、神農、黄帝

五帝——少昊、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜

むろんこの三皇五帝は神話時代で、かぞえ方にも諸説ある。ただ合理主義者の司馬遷などは、三皇をオミットして、五帝から記述をはじめたほどである。

神話や伝説については、

——古い時代とされているものほど新しい。

という奇妙な法則がある。

人間がずる賢くなって、なにやら面白い話をでっちあげても、時代の新しいところは、ぎっしりと詰って、たやすく挿入できない。そこで新しい話は古い時代にもって行く。一ばん古い時代の前は、ガラ空きなので、そこへつぎ足せばよい。

羿の物語が堯の時代だとすれば、三皇五帝の末期であ

り、夏王朝時代とすれば、もっと新しい。しっかりした基礎をもつエピソードというべきであろう。
それにしても、この人間臭さはどうだろう。
与えられた任務の遂行法、人情の機微、男女の葛藤、欲望の渦、信義と裏切り、死にたいする恐怖、師弟に代表される人間関係のきびしさ。――この神話のなかに、それにつづく中国の歴史が、ぜんぶすっぽりとはめこまれている、といってよいだろう。
だから、これを劈頭に置くことにした。

酒池肉林

有蘇氏にうつくしい女がいるという。
そのうつくしさには、誰もが魂を奪われてしまう。
噂は西のかた周にまで伝わった。
殷王朝の末期、紀元前一〇三〇年ごろのことである。周は有力な諸侯として、殷に仕えていたが、そのころは名主文王の時代であった。そして、天下のあるじは、暴君紂王であり、日に日に人心を失いつつあった。
文王の子の武王と周公の兄弟は、父に決起をすすめる。

「殷の徳は衰えました。とってかわるべきであります」
二人の息子が勢いこんでそう言っても、文王は首を横に振って、
「五百年も続いた王朝ぞ。一人の天子が不徳であるからといって、そうかんたんには倒せまい」
「紂があれほど暴虐であってもですか？」
「まだまだ、あれぐらいでは、五百年の積徳が支えてくれよう」
「ほう、まだまだ暴虐さが足りませぬか」
息子たちはそう言って顔を見あわせた。
彼らはいつもそんな話をしていた。領内の政治と天下のこと。兄は実行力にすぐれ、弟は思慮にすぐれている。
「その女のむすめをもらいたいものだが」
ある日、周公はそう言った。
兄の武王はおどろいた。女のことはあまり話題にしない弟であった。美女がほしいというのはわかるが、そのむすめだという。
「その女はまだ嫁いでおらぬそうじゃ。だから、むすこもむすめもいるはずはない」
兄はほほえんで言った。
「では、むすめが生まれるまで待ちましょう」
「ほう、気の長い話じゃな。はっ、はっ……」
武王は大声で笑った。弟が眼前のことよりも、大局を見

る遠謀の人であることは知っていた。だが、政治や軍事のことだけではなく、女にかんしてもさきを見るとは、新しい発見であった。

「私は本気で申しております」

周公は不服そうに言った。

わかりやすいように、武王だとか周公などとしたが、父の文王在世中だから、彼らはそんなふうに呼ばれていたのではない。兄の名は発、弟は旦だったのである。

周公はたしかに本気であった。使者を有蘇氏の国に派遣して、未婚の美女のむすめを養女にする交渉を、ひそかにはじめた。

有蘇氏は諸侯の一人だが、その領土はどこであったか、はっきりしたことはわからない。現在の河南省済源県の西北という説があるが、それなら周と殷の首都のあった安陽地方との、ちょうど中間に位置する。

絶世の美女から生まれるむすめは、やはりたぐいまれな美人になるだろう。美貌はそれ自体、強力な武器である。周公はそのうえに、美貌のもち主を幼少のころから訓練し、べつの力を兼ねて持たせようとした。

噂の美女はまもなく嫁にゆき、何年かたつと、女の子を生んだ。すでに予約ずみであったので、その赤ん坊は周公に引き取られた。だが、周公は相手側とも打ち合わせをして、このことをおもてむきにしなかった。

周公がそのむすめに、赤ん坊のころから仕込んだのはなにかといえば、男の心をとろかすことである。

男といっても、好みに個人差があるし、性格もずいぶん違う。しかし、周公はその訓練において、的をしぼることができた。

天下のあるじ、殷の紂王である。

紂王は暴君ではあったが、それほど暗愚ではなかった。暴君でありえたことは、すでにあるていどの実力があったことを物語る。実力なしに、好き勝手なことをすれば、とうていその地位を保つことができない。

『史記』は紂王のすがたを、――天性の雄弁家で、行動は敏捷であった。見聞してもその理解力はするどく、才能はなみはずれてすぐれていた。体力は素手で猛獣をたおすことができ、知力は臣下のどんな諫言をも言いまかすことができた――と、えがいている。

いっそ暗君のほうが、おだてたり、あやしたりして、御しやすいであろう。抜群の資質のもちぬしである紂は、この世の中に自分よりすぐれた人間はいない、と思いあがっていた。このような男を操縦するなど、至難のわざといわねばならない。

しかも殷は神権政治の国体である。歴史家は殷王をエジプトのファラオに近いと論じているが、たしかに絶対者であった。紂も現人神として天下に君臨したのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com